

～歴史のあけぼの、河内湾・潟を巡る～

完成1300年『日本書紀』と東大阪

行程（全行程徒歩約6～7km）

近鉄石切駅→①日下新池（ヒトモトススキ）→②日下貝塚遺跡→③井上家（貝塚遺跡出土品、原始ハス、稲田桃栽培地）→④旧河澄邸（昼食・弁当）→⑤安岡正篤旧宅→⑥善根寺春日神社→⑦足立家館跡→⑧楯津浜碑・金比羅燈籠→⑨神武天皇聖蹟盾津頭彰碑→⑩鯨骨出土地・布市町→日下リージョンセンターで解散

大阪湾に面する大阪平野は、大阪府と兵庫県東部に広がり、面積約1700km²。摂河泉（せっかせん）平野ともいい、中心部は河内平野ともいう。丘陵地、洪積台地と、淀川、大和川の複合三角洲を主とする沖積平野からなっている。

生駒山系延長27km、幅11km、標高642m。辻子谷越え587m 鳴川峠400m 暗峠455.3m。生駒西麓には南北に断層帯が走っている。

海岸線が大きく入り込んだ古代の大阪湾の東端、日下・石切地域には、豊かな海の幸と山の幸と温暖な気候に恵まれ、人々が生活するのに格好の土地であった。縄文時代の日下貝塚遺跡、鬼虎遺跡など多くの遺跡があり、河内潟の時代に神武天皇が「東に美（うまし）き地有り」と大和入りをめざして上陸した白肩之津、「与に合ひ戦」った孔舎衛（衛）坂、「楯を植（た）てて雄詰（おたけび）」した楯津浜があり、『日本書紀』『古事記』の世界を目の当たりにすることが出来る。

また、「石切さん」と親しまれる石切劔箭神社や歴史の重み、深さを感じさせる善根寺春日神社などの多くの神社が鎮座している。そして、中世近世には、このような豊かな歴史的な風土が、優れた文化伝統、芸術、学術を生み出した。それらにつながる黄檗伽藍大龍寺、旧河澄邸など名所旧蹟が多くある。

≪地名「日下」≫を考える。

太陽＝日本＝日の下（モト）。日本書紀に、「草香邑青雲白肩之津」「孔舎衛（衛）坂の戦い」とあり、ここで長髓彦が迎え撃つ。

古事記では日下と表記。日下江の 入江の蓮（はちす）花蓮 身の盛り人 羨（とも）しきろかも（引田部の赤猪子）。「クサカ」はエミシ語で「船着き場」を表しているという。（比較言語学の進藤治氏による）

日下は「ヒノモト」であり、草香は日下のこと。「クサカ」に日下を当てたのは物部氏の祖先、饒速日尊が河内国の河上の哮峯に天降った。天磐船から虚空（そら）見つ日本（ヤマト）国を見下ろしたことからヒノモトとも読める「日下」をあてたと考えられる。事実、生駒山一帯を「草香山」とか「饒速日山」と称している。饒速日尊を奉った人々（物部）の根拠地の一つがこの「日下」であったと考えられる。

また、地名の石切・イシキリは、進藤治氏によるとエミシ語で、「あの長い脛を持った背の高い男」長髓彦を指すという。古事記では長髓彦を「登美能那賀須泥毘古」。トミは「池や沼の水の湧き出し口」という。

① 日下新池とヒトモトススキ、

日下新池はヒトモトススキの繁殖地。カヤツリグサの一種だが、一株からたくさん茎が出てススキに似ていることからこの名前がついた。別名のシシキリガヤ（猪切茅）はイノシシでも傷つくという意味。日本原産のカヤツリグサ科では最大の植物で、海岸近くの水辺にはえる。海岸では海浜植物などの後方、淡水がわいているような場所に生える。ある程度内陸の池や湿地の水際に出現することもある。東大阪市天然記念物に指定されている。

日下新池に、大軌電車開通後の大正4年（1915）「日下遊園地」が開設され周辺には料理旅館、少女歌劇団、ミニ動物園、池には貸しボートが浮かび春には花見の人達で賑わっていた。

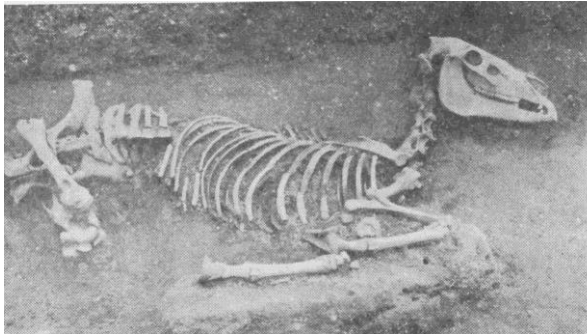
大正15年（1926）あやめ池（平成16年閉園）が開園すると、徐々に衰退し、施設や建物は転売されるようになり、その後風光明媚なこの地の建物は「孔舎衛健康道場」として手足の屈伸鍛錬と冷水摩擦の療法を行う施設と生まれ変わった。昭和12年～17年秋ごろまで全国的にも有名な結核療養施設として運営されていた。京都に住んでいた木村庄助が、昭和16年（1941）8月から年末にかけて孔舎衛健康道場に入院し、療養生活を克明に記した日誌を遺した。太宰治は木村から贈られたこの日誌を題材にして『パンドラの匣』を書き、戦後の20年10月から翌年1月にかけて『河北新報』（仙台市の日刊新聞）に発表した。

② 日下貝塚遺跡

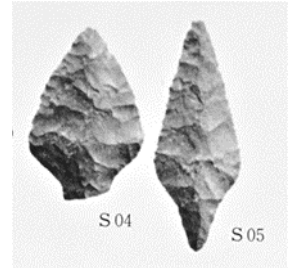
日下貝塚遺跡は「碑」のある所より30m程登った所にある。日下川右岸の暖かい南斜面に広がる標高20m前後の日下町2～7丁目にわたる地域が、縄文時代後期～江戸時代の複合遺跡で昭和47年（1972）、国史跡指定を受けた。

大正15年より昭和60年まで13次にわたる調査が行われた。この間、京都大学・末永雅雄博士、帝塚山大学考古学研究室、大阪府、東大阪市教育委員会が発掘調査している。

遺跡の概要は、土拡墓、住居跡が検出され、縄文土器、韓式系土器、製塩土器、鏃などの石器、動物遺体、セタシジミ他19種、埋葬人骨31体が出土している。これらの人骨は、縄文時代の葬制、墓制、風習などの研究に大いに寄与している。



本年1月10日、「昭和41年（1966）に完全な形で出土し、古墳時代の馬の全身骨格がわかる唯一の例として注目された。この馬は骨格などから12歳前後の牡馬で体高約130cmの蒙古系の中型馬に属すると鑑定されている。当時、埋葬されていた土器の年代から5世紀後半と推測されていた。…この馬の骨を放射性炭素（C14）年代測定の結果、馬は4世紀末から6世紀中頃の間に生存していたことが判明した。」と新聞報道された。



古代、生駒西麓一帯で馬の飼育が広く行われていたことが十分に考えられ、『日本書紀』継体紀元年の条に「河内馬飼首荒籠」、24年条に河内馬飼首母樹御狩（おものみみかり）、河内馬飼首押勝の名もある（母樹＝東大阪市豊浦）。また、郷土博物館付近に、字名「馬ハギ」があり、河内寺廃寺跡付近は、河内馬飼部の一族、河内漢直・河内漢人、河内馬飼造・河内連が居住した地域とされている。

地球温暖化の流れの中で、海拔20m前後の高さにあるこの遺跡が、海拔2～3m当時と同じ「風景」を見せることになるのでは、と恐れる。この遺跡から＜平和＞と＜環境＞を考えたいものだ。

③ 井上家邸（日下貝塚遺跡出土品、屋敷周辺の原始ハス、稻田桃栽培地）

・井上家住宅は、大和棟・箱棟造りで大黒柱に天明4年（1784）の祈祷札あり。当家の天保年間の古図と比較対照すれば、屋敷構え主屋門がよく残存されている。土間部分は原形を残している。

18世紀に大改造。土間と居室境に三本溝の差鴨居に戸袋、元納戸（なんど）廻りに閉鎖性の強いことから、建築は17世紀迄遡ると推定される。

・庭には、辰巳井戸が掘られ、秋楡（にれ）が大きく枝葉を伸ばしている。

・家の中、武者隠し（2帖半）、竈（かまど・「へつついさん」と、呼ぶ三宝荒神を祀る）

他に、制札、定、火打ち箱、網行燈、時香盤を所蔵されている。

《貝塚遺跡出土品展示》

遺跡からの出土品の多くは埋蔵文化財センターに保管されているが、井上家の家人が発掘調査前に掘られた品を、許可を得て保管されたきた。土間には磨製石器、サヌカイトの石鏃、突端文のある縄文土器などの出土品が展示されている。展示はされていないが、約2500年前の女性（30～35才位）の頭骨も保管されている。

《原始蓮と稻田桃栽培地》

原始蓮は、蓮の固有原種。原始蓮の実他他の植物と比較にならない程緻密。皮は硬くて水や酸素を通さず呼吸を生命の維持できるぎりぎり抑制。ここの蓮は、およそ1500年も前から、花を咲かせていたと伝えられている。善根寺町あたりに自生していた原始蓮は、昭和45年には「枚岡の原始蓮」として大阪府の天然記念物の指定を受け、現在、株分けされ、東大阪市石切山手幼稚園・大阪四天王寺・大阪市長居植物園をはじめ大分県、山口県、高知県など10箇所で栽培されている。

○『古事記』雄略紀の引田部赤猪子（ひけたべのあかいこ）の歌

日下江の 入り江の蓮（はちす） 花蓮 身の盛り人 羨（とも）しきろかも

『万葉集』都にいた大宰帥（ださいのそち）大伴旅人が筑紫の沙弥満誓へ贈った返歌2首

ここにありて 筑紫（つくし）や何処（いづち） 白雲のたなびく山の 方にしあるらし

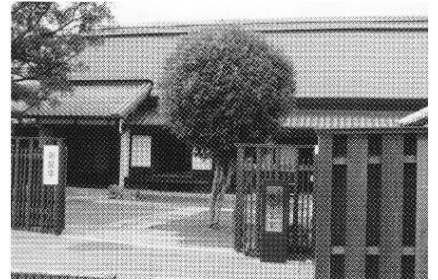
草香江の 入り江にあさる蘆鶴（あしたづ）の あなたづたづし 友無しにして ※歌碑は博多にある

新元号「令和」の出典は『万葉集』、梅花の宴（うたげ）の歌の序文、大伴旅人の「初春の令月（れいげつ）にして、気淑く（きよ）風和らぎ（やわらぎ）、……」といわれている。

○稲田桃は大変小ぶりの桃で、大きさは、スモモ程度。形は昔話「桃太郎」にでてくる先のとがった濃いピンク色をした桃。江戸時代の河内名所図会にも「稲田桃林」として描かれている。江戸時代は、お盆のお供え物として、栽培されていた。『古事記』の伊弉諾（いざなぎ）が、黄泉比良坂で追いかけてくる伊弉冉（いざなみ）に投げた桃三つとはこの稲田桃だった。

④ 旧河澄邸

旧日下村の庄屋屋敷。現在、旧河澄邸には大坂町奉行、曾我丹波守又左衛門古祐（ひさすけ）の設計による「棲鶴楼（せいかくろう）」と呼ばれる奥座敷が残されている。町奉行役料としての一時的な領地（寛永11年～万治元年、3千石）であった日下村であったが、晩年には日下村で暮らすほど村人たちと強い絆で結ばれていた。丹波守は大坂町奉行を退任後、「河澄家」に移り住み、万治元年（1658）4月、73歳で没している。



江戸時代後期の国学者、上田秋成は「雨月物語」の著者として高名だが寛政10年（1798）日下の里に滞在し療養したことがある。

上田秋成は、曾我丹波守が日下の農民たちに善政をひいた領主として語り伝えられていることについて、「この岡のべに御所の池とて心ひろく掘りたるがあるを、夏は必ず田にそそぐが（中略）此の池はいにしえ慶安の比、曾我丹波守どのと申しが掘らせ、千町の田はた是に養われて、百五十余年こなたの国宝となん成りぬることのかたじけなさよ」と、記している。曾我丹波守は、これらの費用を全て領主負担（御入用普請）にして、村人に負担を掛けなかったという。

邸内にある、カヤの木は樹齢500年を越え市の天然記念物に指定されている。碁盤の用材として著名なカヤの木は冷涼な気候を好む木であり、実は食用や薬用（十二指腸虫駆除）に用いられていた。庭は江戸時代初期の枯山水形式で味わい深い。

大阪湾を一望できる景勝地にあり河澄邸は平成13年、東大阪市に寄付されている。

⑤ 安岡正篤旧宅（非公開）

向井家の南西に茅葺きを銅板で覆った入母屋造りの農家風の住宅がある。陽明学者であった安岡正篤氏が明治41年から大正4年までの7年間、居住していた。安岡氏は、この家で小学校5年生から旧制四条畷中学5年生まで過ごし、そして東京へ出て、東京大学を卒業され、のち歴代首相の指南役を務めたほか、「平成」の元号の発案者となったといわれている人物でもある。

孔舎衛小学校の創立100周年を迎えた年に来校され、子どもたちに講演をされた。その時に記念にと、“心明く 望清く”と揮毫された碑が校庭にある。

⑥ 善根寺春日神社

善根寺の旧村社で、『大阪府全志』によると「神護景雲2年（768）枚岡明神を分霊して大和の春日に遷座するのに供奉した一行のうちの、25人が河内に立ち帰り、この地に春日四神を勧請したのが当社の起源である」と伝える。

「宮仕ノ者供奉シ移リシガ、後故アリテ 春日明神屋根職ノ者二十五、宮郷土出雲井二帰リシガ転ジテ茲土ニ来リ善根寺ノ傍ニ住シ、漸次戸口繁殖シテ遂ニ村落ヲナセリト……」（孔舎衛村史）

祭神は 天児屋根命、比賣神、経津主命、武甕槌命の春日四神を祀る。この春日25人衆が春日神社の屋根葺替えなどに奉仕し、宮座へと発展したという。

拝殿横に「日本最初春日神社」の額がある。枚岡神社が四神を祀ったのは、善

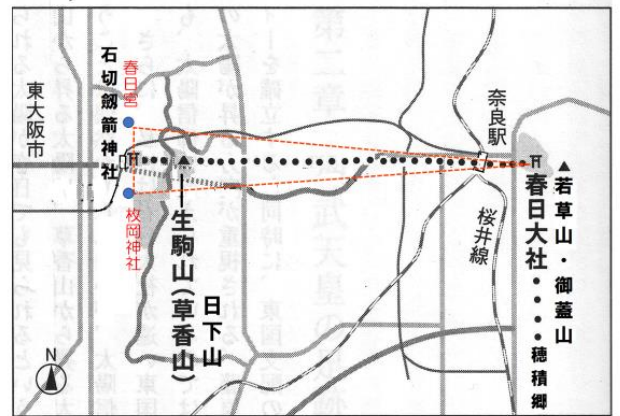


根寺春日神社より10年後の宝龜9年（778）であった。

因みに奈良の御蓋山に藤原氏の祖神、春日四神が祀られた経過を少し紹介すると、天皇家の皇祖神、天照大神を伊勢に追いやったあと、しかも石切劔箭神社の真東の平城の地に神護景雲元年（767）正月に武甕槌神（師靈剣（ふつのみたまのつるぎ）布都御魂（ふつのみたま）が常陸国鹿島神宮から向かえられ御蓋山山頂「浮雲峰」に鎮座。そして、神護景雲2年（768）11月9日、山の中腹に南向きの社殿を造営し、香取神宮の経津主神（ふつぬしのかみ）を迎えた。更に、中臣氏の祖先神、天児屋根神、比売御神の二神を枚岡明神から、**孔舎衛春日宮**、暗峠、饒速日命ゆかりの登彌神社を経て御蓋山の社殿に鎮座した。このことがあって、枚岡神社を「元春日」と呼ぶことになった。

善根寺春日神社は、明治5年（1872）に枚岡神社に合祀されたが、1881年復社し、現在に至っている。拝殿にかかっている扁額は江戸時代に梵学研究と仏教の復興に尽力した慈雲尊者が寄進したもの。

拝殿の脇に立っている灯籠の説明文には、「承応3年（1654）『桧皮御座』の文字があり、春日陣屋の若宮の屋根簷に奉仕する人々により村が作られ、本社が祭られたことがわかる。また、拝殿の横にある石碑の上にのっている2個の石「おきよ石」は、昭和15年（1940）神武天皇東征2600年を記念して「おきよ丸」の船を復元し、宮崎から大阪に向け航海、その時に運ばれて来た石が縁の深いこの神社に奉納されている。



同緯度にある二つの神社(いずれも東に山、西に都がある)

《「春日」について》

1. カ（神）ス（栖）ガ（処）（松岡静雄氏）
2. ヒノモトノクサカ、草香＝春 日下のくさ 合わせて「春日」
奈良では、春＝若 日（くさ）＝草 「若草」山、「春日」山、「春日」大社の社名

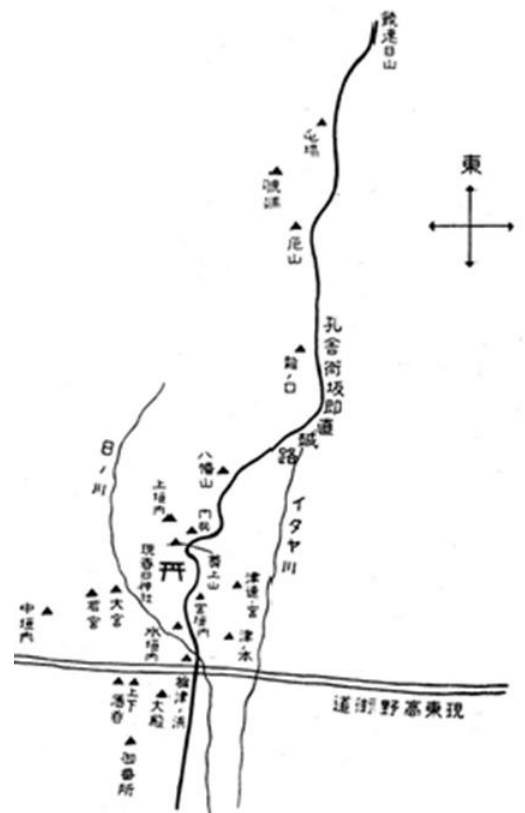
《『孔舎衛春日宮社記』より》

神武天皇の御親祭あり、更らに皇子神八井耳命は春日の県主として此所に宮居し給ひ、天皇神去りてませる後、天皇を御祭り申上られましたので、春日の御神名が起れる所以であります、……御歴代の天皇毎に勅使を賜はり、且つ神八井耳命の御子孫の奉仕し給へる御社であります、その後崇神天皇の七年、武恵賀前命に詔して改め神詞を作り、社地を號づけて大宅郷と云ひ、天社を定め、神地を封す、舊名は春日宮、河内国日下県神社と共に祭る所の神を一同神格と為し、ここに春日の名を得るなりと和州五郡神社神名帳に載せてあります、原来この草香の地は神代以来河内の首都でありまして、歴代の國造、県主等は皆此の地に居られたのであります、…………。（原文のママ）

⑦ 足立家館跡

足立氏は、古代氏族和気氏の末裔と伝えられる。戦国時代も末期、足立又助昌成は、はじめ織田信長に仕え、尾張国に住んでいたが、後に豊臣秀吉に仕え、大坂城築城にあたって石奉行を命じられ、この地河内郡善根寺村に移り住んで、周辺の山々から築城用の石材を多量に切り出した。その子、仁兵衛宗佐も父の死後普請奉行を命じられ、徳川幕府のもとに大坂城修築用石材を切り出し、以後、足立氏は在地の豪族として栄えた。

足立氏の屋敷跡は、現存する濠の外縁にはかまぼこ状の土塁があるなど、今も完全に城館的色彩を残している。広大な周濠と石垣で囲まれた敷地は、東西約110m、南北85m、面積約9400㎡測る大規模なものであった。延宝8年（1680）の屋敷図によると、屋敷部には石垣が見られ、広縁を有する大規模な本屋のほか大門、門が構えられ周囲に各種の蔵（米蔵など）を配し、中央に庭園と広大な田地を持っていた事が分かる。



⑧ 楯津浜石碑

自然石に「楯津濱」と刻まれたこの石碑は、神武東征の折、この辺りを「楯津」と名付けた故事に因むもの。この付近には文化7年（1810）銘の金比羅燈籠（航海の神として海上交通の安全守護）もあり、江戸時代には、「善根寺浜」という船着き場があり大変栄えたと言われている。



⑨ 神武天皇聖蹟盾津頭彰碑

孔舎衛小学校の東側、海拔20mの所に立派な石組みの壇の上に「神武天皇聖蹟盾津頭彰碑」が建っている。昭和15年（1940）、皇紀2600年「紀元節」を記念して建立されたもの。2月11日は、現在では祝祭日「建国記念の日」と言われているが、紀元前660年2月11日を「紀元節」としていた。

「碑」の周辺には、神武東征とつながる地名など由緒のある遺跡・遺物が残されている。

善根寺春日神社境内の一角に「神武天皇御東征孔舎衛（衛）坂古戦場」の碑が建てられているが、長髓彦（ながすねひこ）との孔舎衛（衛）坂の戦いで、神武の兄、五瀬命の肘に流れ矢が当たり、それ以上前進することができなく退却を余儀なくされ、「そこで草香の津までに戻り、楯を並べ、声を揃えて勇ましく雄詰（おたけび）をした」処を「楯津」と言うようになったことや、五瀬命が血を洗い流したという「龍の口霊泉」が近くにある。また、神武が利あらず船の楫をなくし漂揺したという伝説が残る「楫無神社」が南に下った六万寺に鎮座している。さらに、傷ついた五瀬命の血を洗い流したことから「血塗りの海」が訛り大阪湾を「茅渟の海」となったことなどである。

「碑」を見学し、神武を迎え撃った郷土の英雄、長髓彦に思いを馳せたいものだ。

不思議なことは、饒速日命を祀る石切劔箭神社境内に、なぜか神武社が鎮座している。ご神体は神武が武運を占うために空高く蹴り上げたという大岩だという。

≪「日下をめざした神武天皇」 『日本書紀』≫

1. 神武天皇即位前紀に、塩土老翁は「東に美き地有り、青山四周れり、其の中に亦天磐船に乗りて飛び降る者有り……」、神武は「厥の飛び降るといふ者は、是 饒速日と謂うか」と語っている。

2. 神武紀31年条に、「饒速日尊、天磐船に乗りて、大虚を翔り行きて是の郷を睨（おせ）りて降（あまくだ）りたまふに及至りて、故（かれ）因りて目（な）つけて「虚空見つ日本（やまと）の国」と曰う

3. 「奔き潮有りて太だ急ぎに会いぬ…遡流而上（かわよりさかのぼ）りて…河内国の草香邑の青雲の白肩之津に…歩より竜田に趣く…胆駒（いこま）山を踰（こ）えて、中州（なかつくに）に入らん。そして、孔舎衛（衛）坂にして…与に合ひ戦ふ」

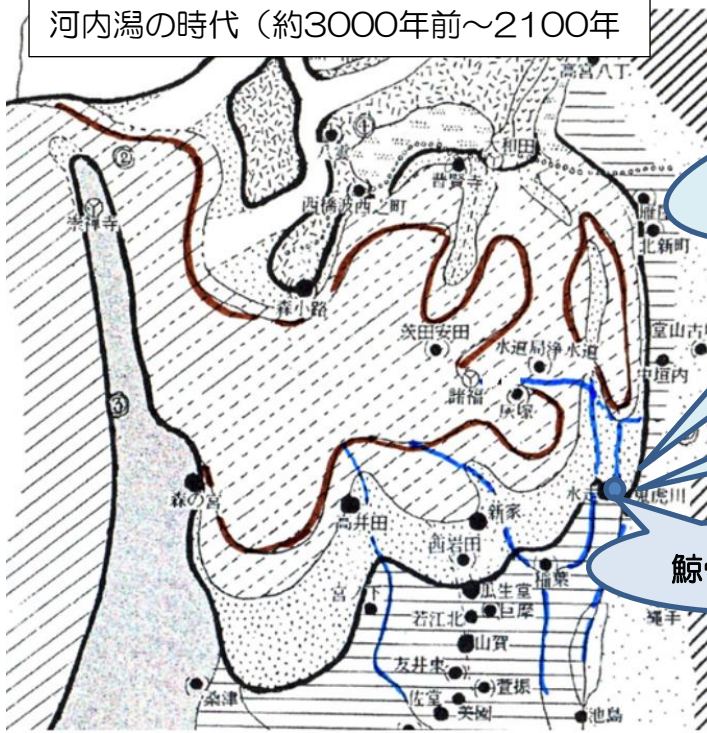
4. 神武「今我は是日神の子孫にして、日に向かって虜（あた）を征つは、此天道（あめのみち）に逆れり。若かじ退き還りて弱きことを示して、神祇を礼（いわ）び祭（いわ）ひて、背に日神の威（みいきほひ）を負ひてたてまつりて、影の……。却りて草香津に至りて、盾を植（た）てて雄詰したまふ。因りて改めて其の津を号けて盾津と曰う。蓼津と云へるは訛（よこなば）れるなり。

古事記では、登美能那賀須泥毘古、軍（いくさ）を興して待ち向かへて戦ひき。ここに御船に入れたる楯を取りて下り立ちたまひき。故、其地を號けて楯津と謂ひき。

⑩ マッコウ鯨の骨出土地・布市町

昭和49年（1974）、国道170号線近くで行われた恩智川のポンプ場の工事で、深さ約6m下から巨大な骨が発見された。骨は、マッコウ鯨の骨で、頸骨・肋骨・歯等であって、放射性炭素（C14）年代測定の結果は、BC3050年（±150）。約5000年前の河内湾の時代（縄文前期）に湾奥に迷い込み、体長約10mのマッコウ鯨は引き潮の速さに干潟に取り残されたものと考えられている。なお、近くの鬼虎川遺跡東北部域から縄文時代前期の縄文海進による5.6mの海食崖（がい）が検出されている。

河内潟の時代（約3000年前～2100年



草香津（楯津浜）神武、雄略
船着き場

草香邑白肩之津 神武上陸地
磯、石がごろごろした船着き場

鯨骨出土地



上の写真

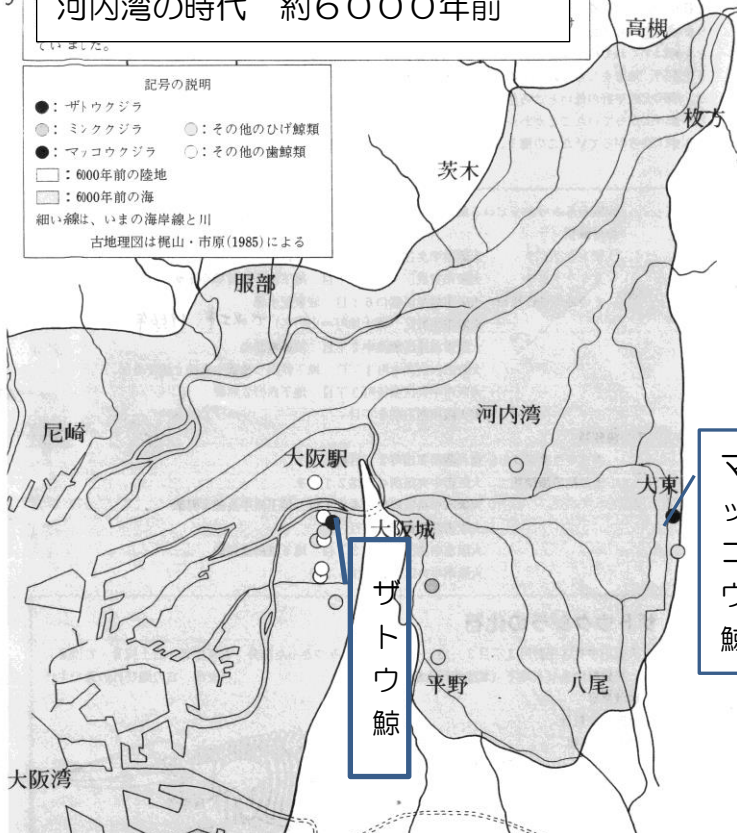
布市町で出土した、体長約10m級の
マッコウ鯨の頭骨
（東大阪市立郷土博物館）

左の河内湾の図（大阪市立自然史博物館）
明治18年の大洪水の浸水地域範囲図と
ピッタリとあう。

大阪くじら化石マップ

河内湾の時代 約6000年前

- 記号の説明
- ：ザトウクジラ
 - ：ミンククジラ
 - ：マッコウクジラ
 - ：6000年前の陸地
 - ：6000年前の海
 - 細い線は、いまの海岸線と川
 - ：その他のひげ鯨類
 - ：その他の歯鯨類
- 古地理図は梶山・市原(1985)による



マッコウ鯨

ザトウ鯨

以上

文責 南 光弘